小講義 I

12月10日（月）午前9:30～11:00（T1～T7）

小講義は、最近の学生に関する Up to date なトピックスや喫緊の課題、各大学の学生支援や学生相談の実践に役立つような話題、支援者自身のセルフケアや学生相談の豊かな実践から構成されています。小講義 I は2日目の午前中、小講義 II は3日目の午前中に関催しますので、皆様の興味や関心にあわせてそれぞれ1つずつ受講してください。

T 1 学生相談と精神医学（研修領域 C）

講師 安宅 勝弘（東京工業大学）

演者の所属校では、精神科医によるメンタルヘルス相談（必要な場合の投薬治療を含む）と、心理カウンセラーによるカウンセリングが同じ施設内（保健管理センター）で行われています。学生の中には、はじめから精神科医の診察を希望する者もいるが、多くの場合は漠然と、あるいは本人なりのイメージをもって「カウンセリングを希望して」来談する。そして実際にカウンセラーが対応し、精神科医もし関与した方がいいと判断されたケースは、それぞれとの面談が並行してもたれることになる。精神科医とカウンセラーは、診断（見立て）や経過について、必要最低限の情報共有はしているが（これをしやすいことが同じ施設で仕事をする最大の利点である）、ときどき、学生本人にそれぞれの面談のイメージや受けてきた印象、異同について尋ねてみることがある。演者の場合、事例によって診断や投薬治療というスタンスを前面に出して関わるケースから、病的側面にあまりフォーカスしない心理的サポート中心の関わりまで様々であるが、ここでは臨床実践としての精神医学と学生相談という観点から考えてみたい。

講師紹介

安宅 勝弘（やすみ かつひろ）

東京工業大学保健管理センター、学校医・産業医（精神科医）。本研修会ではこの小講義を10年以上担当しています。なるべく、日頃、相談の場で出会う学生をイメージしながらお話したいと思います。
T2 キャリア開発と支援（研修領域D）

講師 杉山 崇（神奈川大学）

日本はムラ社会的な「カイシャ」に人生を委ねる生き方で定着していましたが、今の日本ではこの生き方はスタンダードでなくなりつつあります。グローバル化の影響でビジネスのライフサイクルが早まり、人材の流動化を求める企業が増えているのです。その結果、労働者には自分の人生への責任を持ち、人生の自己設計が求められるようになりました。

しかし、日本では求められる生き方の転換が2000年代に急激に進みました。そのため、キャリア教育が行き届かず、さらに適切なロールモデルも見つけにくい状況が続いています。その中で若者は自分の人生を描きにくく不安になりがちです。近年は将来への不安が若者の人格的な成長を阻み、精神的な不調に追い込む大きなファクターになっているようにと思われます。

未来ある学生を預かる私たちは、学生が希望を見出す支援も担っていると思います。私は学生が向き合う未来を見据え、そこで学生が未来を生き抜く姿を共有する相談担当者でありたいと願っています。この小講演では学生を不安から守り、未来を描ける学生相談を一緒に考えましょう。

講師紹介
杉山 崇（すぎやま たかし）
うつ病研究を半世紀続ける中で人から大切にされている実感（被受容感）を保つこと、そして未来と「自分」を見失わないことがうつ病予防につながることを確認できました。そこで対象者の未来と「自分」を守りたくてキャリア・コンサルティングも行うことになりました。ゼミナールも学生相談を担当していますが、双方でキャリア展開の支援も行っています。先生方とご一緒に学生支援を考えるのが楽しみです。

T3 ADHDの診断－ASDとの合併と鑑別に着目して－（研修領域C）

講師 内山登紀夫（大正大学）

ADHDと診断される大学生が増えているようだ。ADHDは児童期の特性が明らかになる発達障害で不動・不注意・衝動性の3つの特性がある。

成人期 ADHDの主訴は「仕事の優先順位がつけられない」、「段取りが悪いか」、「部屋が片付けられない」、「時間守れない」、「不注意なミスが多い」、「後先考えずに行動してしまう」などが多い。不注意、落ち着きのなさ、衝動性、実行機能障害などの外在的なADHDの行動特徴は、比較的自覚しやすい。よって「自分はADHDではないか」という主訴で受診する患者の多くはネット情報や一般向けの解説を読み、症状の有無をチェックして症状が当てはまればADHDと自己診断して来院する。

このような特性は、誰でも多少は持っている、本当にADHDなのかどうかの判断に追われることもある。

ADHDの学生を支援する際にはASDの合併を常に考慮することが必要である。効果的な支援をするためにも、適切に見立てることができる必要である。研修会では、ADHDと診断された人を、どのように見立て、どのように支援するかを検討する。

講師紹介
内山 登紀夫（うちやま とお）
大正大学臨床心理学科教授・よこはま発達クリニック院長。福島大学子どものメンタルヘルス支援推進室客員教授、福島県立医大津医療センター特任教授等を兼務。東日本大震災直後から福島県自閉症協会、福島県障害福祉部などは協力して震災後の発達障害の子どもたちの支援・研究活動を続けている。
T 4 認知行動療法に基づく精神障害学生の体験理解と回復プロセス（研修領域Ｂ）
講師 林 潤一郎（成蹊大学）

本講義では、いくつかの代表的な精神障害（うつ病、パニック障害、社交不安障害、強迫性障害などの予定）を題材として、その認知行動療法（認知行動理論）を紹介しながら、（1）各精神障害のある学生が（症状を含めて）どのような体験をしているのか（どのような点に問題や困難を抱えていて、それが維持されていることが多いのか）、また、（2）各精神障害のある学生が、就学を継続するために、症状を和らげたり問題や困難を克服すべく、どのような努力や工夫をしていることが多いのか（回復プロセス）について、一般的な理解を（エッセンスのみにはなりませんが）得ておくことを目的とします。

精神障害のある学生の抱える困難は個別性が高いため、こうした理解を一方的に当てはめることは注意が必要ながら、参照枠として学内の教職員および専門家にいただくことで、障害のある個々の学生への（教育上もしくは支援上の）適切な理解やかかわりが提供しやすくなるように感じています。また、精神障害における（合理的）配慮提供時に、何をどこまですべきかの判断の一助としても本講義がお役に立てれば幸いです。

講師紹介
林 潤一郎（はやし じゅんいちろう）
成蹊大学学生相談室専任カウンセラー（兼経済学部・心理学担当）准教授として、大学教職員と連携をしながら、学生の教育と支援に携わっています。認知行動療法については、国立精神・神経センターや原田メンタルクリニック・東京認知行動療法研究所での臨床経験と放送大学での講師経験がありました。

T 5 フォーカシング体験入門（研修領域Ｂ）
講師 福田 憲明（明星大学）

フォーカシング（Focusing）とは、「からだ」の奥の方で感じてながら、「ことば」では表現できない“感じ”に注目し（焦点 Focus を当て）、その感じが含むする意味を明確にしていくプロセスです。C.ロジャースの共同研究者の E.T.ジェドリン（Gendlin）が、このプロセスがセラピーの重要な要素であると見出し、そのプロセスを練習できるように開発し、現在はセラピーの一つの技法としても発展してきています。

表現しつらえれど、はっきりと“感じられる感じ”（フェルトセンス）を感じていると、やがて言葉やイメージが湧かんできます。その表現を手掛かり（ハンドル）にして、さらにからだの奥の動きにフォーカスしていくと、その感じが意味することが見えてきます。ゆったりと、感じと言葉を響き合わせて行くうちに、ハッとする感覚、胸のつかえが取れ、胸に落ちるような、一種の解放感（シフト）が得られます。

からだの奥の豊かな体験の意味に気づいていくことが、フォーカシングのねらいです。小講義は実習を中心に進めて行きます。参加者皆さんも、少しでもからだの智に触れる体験が出来ればと考えています。

講師紹介
福田 憲明（ふくだ のりあき）
学生相談カウンセラーの経験を基盤として、現在は教員として学生たちの成長を促し支える「援助的人間関係」のありかたを考えています。最近は、「自然」「自由自在」の意味を大事にしようと思っています。心と身体が伸びやかになる環境を、いかに提供するかに関心があります。大学カウンセラー、臨床心理士。
T 6 アドラー心理学から学生相談を考える（研修領域B）
講師 鈴木 義也（東洋学園大学）

今やアドラーの本はフロイトやユングよりも多く見かけ、一般の知名度は上がってきたが、心理学専門職においては学ぶ機会が稀有なためにあまり知られていない状況です。

講義では、最低限知っておきたいアドラーの知識を入門編として紹介し、さらに、学生相談でも使えると考えと技法を実践編として説明します。

アドラーは自らの流派以外にも、マズロー、フランクル、エリス、ベック、ロジャーズなどを教え、幅広い流派に影響を与えているので、既にお使いの手法の中にその原型を見出せることもあるかもしれません。それら多くの側面が統合されて使えるのもアドラーのいいところです。

また、アドラーは当分から精神疾患のみならず、家庭・子育て・学校・地域、そして、人生を生きることへの支援を目指しており、それがために手法も個人・集団・家族・学級・コンサルテーション・心理教育など多岐に渡った実践をここなってきた。アドラー心理学ではどのように幅広く働く心理職としての技法のみならず指針となる理念も合わせて学びます。

参考書著「アドラー臨床心理学入門」「臨床アドラー心理学のすすめ」「まんがで身につくアドラー」

講師紹介
鈴木 義也（すずき よしや）
東洋学園大学教授。臨床心理士。学校心理士。学生時代は大学合同エンカウンターグループに度々参加。非常勤3校と専任2校で学生相談に携わる。関東地区学生相談研究会の会長。今の臨床は精神科や開業。家族療法、ブリーフ、催眠、アドラーなどに手を染めるがほぼ通底するのは構成主義。

T 7 奨学金の現状と学生の課題—金融に関する教育の試み—（研修領域D）
講師 坂本 雅士（立教大学）

大学を取り巻く環境変化や学生の多様化に伴い、経済支援のあり方が問われるようになって久しいです。この間、各大学は既存の奨学金のスクラップ・アンド・ビルドを行い、予約型奨学金や留学プログラムに対する奨学金、しょうがい学生（身体、精神）に対する経済支援等、さまざまな支援制度を構築してきました。

今後、奨学金制度を一層充実させていくためには、そこに在する課題にも積極的に目を向け、対策を考えていく必要があります。たとえば、日本学生支援機構（JASSO）の奨学金負担は試みで、返還が滞った利用者や親等に残額の一括返還を求める訴訟が激増し、大きな社会問題になっています。背景には、長引く雇用不安や所得低下等の影響によって返還が困難になっている実態がありますが、その一方で、奨学金受給者の金融インフラの低さ及び進延につながる見逃さない要因だといえるでしょう。このことは受給者への金融教育の必要性を示唆しています。

この講義では、奨学金制度の現状と今後の課題や対策等についてお話いたします。

講師紹介
坂本 雅士（さかもと まさし）
立教大学経済学部教授、前立教大学学生部長・前日本私立大学連盟奨学金等分科会分科会長（2014年4月〜2018年3月）。昨今の教育無償化の流れの中でも、奨学金制度が果たす役割は大きいと感じています。
小 講 義 II

12月11日（火）午前9:30～11:00（T8～T14）

T8 カウンセリング入門（研修領域B）
講師 窪内 節子（山梨英和大学）

この全国学生相談研修会にご参加の皆様の中に、カウンセリングに関する本は随分と読んだものの、実際のところカウンセリングが分かった気がしない、あるいは書かれているカウンセリングの理論と実際がどのように結びつくか分からないなど、不満感を感じている方がいると思います。その一つの理由として、カウンセリングの専門書は、ほとんどが理論の専門家によって書かれているため、その理論を専門とする人には理解可能だが、難解で分かりにくいことが挙げられます。このような問題を打破するために、私と吉武光世さんで、自分の専門としない理論にまでも取り組み、一緒に書いた本が「やさしく学べる心理療法の基礎」（倍風館）という本です。幸い好評で、多くの方々から評価を受けています。この本をベースに、カウンセリングの基礎といわれる、精神分析療法、クライエント中心療法、行動療法（認知行動療法）のエッセンスに、できれば新しい知見も加えて、窓内流に縦横無尽に語りつつ、体験的に楽しく学んで頂ければと考えています。

講師紹介
窪 内 節子（くぼうち せつこ）
山梨英和大学副学長を経て、現在特任教授。博士（心理学）。長年、学生相談に関わってきましたが、卒業後の3年を含む3年間に開業（青山メンタルヘルス）しました。「さあ、これから心理臨床に専念するぞ」という意気込みで、ケースに向かいつつ、ネットワーク作りにも励んでいます。

T9 発達障害のアセスメントーWAISを中心にー（研修領域C）
講師 羽井 岳史（路地裏発達支援オフィス）

学生相談等の臨床心理相談の中では、発達障害のアセスメントツールの一つとして、知能検査が活用されることがある。ただし、相談担当者が知能検査の施行・採点を担当するとは限らない。さらに言えば、相談担当者の所属機関内で知能検査が施行されるも限らない。

知能検査は、相談担当者が直接施行・採点する場合や、身近にテストが存在する場合には、クライエントの反応特徴などの豊富な情報を明らかに与えてくれる可能性が高いが、他機関で施行された数値の結果（プロフィール）のみならず、クライエントを通して担当者の手元に届くことは珍しいことではない。

そこで本小講義では、知能検査結果の情報として、プロフィールのみが与えられた場合などに、そこから何を読み取るか、何を検討するか、すなわち与えられた限られた情報を、最大限に臨床的に活用する方法について検討と提案したい。以上の趣旨から、本小講義では、日ごろ知能検査を自分自身で施行する機会のない臨床家への参加を歓迎する。

講師紹介
羽 井 岳史（いたと たけし）
2014年4月より、路地裏発達支援オフィスの（代表）臨床心理士です。他に、川越少年刑務所、都立南大沢学園（特別支援学校）、立教大学兼任講師などを兼務しています。治療的・支援的に意味のある心理アセスメントについて、試行錯誤しているところです。
T10 各大学の試み（6）－LGBTへの取組みについて－（研修領域E）

講師 河野 祐之（筑波大学）

LGBTを含むSOGI（Sexual Orientation and Gender Identity）に関する話題は、現代社会において重要なトピックとして認識されています。同様に、最近では大学等の場においても取り組むべき課題として認識が広がっています。実際、キャンパスにはSOGIに関連して多様な学生が集い、学生生活を送っています。しかし、残念ながら大学側に必要な理解がなく、あるいは偏った理解、不十分な理解により、当事者の学生が「いないもの」として扱われたり、支援を求めたとしてもも適切な対応がなされる場合が少なくありません。筑波大学は、全国の大学に先駆けて2012年3月に「LGBT等に関する筑波大学の基本理念と対応ガイドライン」を公式に策定しました。本講義では、SOGI/LGBTに関する最低限の基本的な知識を共有するとともに、各大学の事例をもとに、なぜ大学側が支援に取り組む必要があるのか、多様な学生を受け入れる意義について議論するきっかけとして考えています。

講師紹介
河野 祐之（かわの ゆうゆき）
筑波大学ダイバーシティ・アクシシビリティ・キャリアセンター助教。臨床心理士。筑波大学におけるダイバーシティ推進の実務を担当し、特に女性活躍支援とLGBT等に関する取組の中心を担う。LGBT等に関する基本理念とガイドライン作成をとりまとめ、LGBT等に関する相談業務も兼務する。

T11 多様な性をもつ学生の心理的支援（研修領域D）

講師 佐々木 掌子（明治大学）

「多様な性」は、学生相談に関わるすべての方々に基本のキとして知っていただきたいという思いがあるので、今回は、去年参加されなかった方を対象にそのお話しさせていただこうと考えております。

本講義では、LGBTやSOGI（Sexual Orientation and Gender Identity：性的指向と性同一性）などの基本概念をご紹介した後、①「語られない性的指向」のケース、②男性と女性とも規定しない性別（Xジェンダー）のケース、における支援について皆さんと考えていきたいと思います。これは、おそらく学生相談ではLGBTのアイデンティティを持つ学生よりも、アイデンティティとまでは形成していなかったり、それ以外のアイデンティティを模索している学生を担当することのほうが多いと思うからです。

すでに性的指向や性同一性にまつわるテーマを持つ学生を担当している方だけでなく、実はこれらがテーマである学生にも関わらずカウンセリングで語られていないのではないかと懸念を持つ方も、多様な性を豊かに持つ学生たちの支援に、どのような知識と意識と構えが求められているかについて、共に考える場にできたとと思います。

講師紹介
佐々木 掌子（ささき しょうこ）
臨床心理士。修士課程時代からトランスジェンダーに関わり始め、ボストロク時代は小児・青年期の性別違和を学ぶためトロントに留学しました。産婦人科クリニックでカウンセリングもしています。近刊は「トランスジェンダーの心理学 －多様な性同一性の発達メカニズムと形成－（児洋書房）」です。
T12 地域精神保健との連携—資源とつながり—（研修領域D）

講師 植池 礼子（植池臨床心理オフィス）
「治療費がない」、「家族会を知りたい」、「人が入ることのできる施設は？」…精神保健福祉センターに勤務して、最初の頃に出会った相談は、私にとって忘れられないものでした。クライエントの主訴を受け取って、必要な資源、制度などを必死に探し、尋ねまわりました。自分の心理職としての知識や、学んだスキルが、こうした相談にどう役立つか、と模索することが続きました。

「新しい領域の勉強が必要なのは」と思い、そうすることで、自分の本来の職種のアイデンティティはどうなるのか…あれこれ考えた結果、私が見つけた新しい領域の概要を紹介いたします。今後、社会の働きかけにおいて役立つと考えています。お手数ですが、ご活用いただけると幸いです。

講師紹介
植池 礼子（きち なえこ）
植池臨床心理オフィス・カウンセラー。臨床心理士として、埼玉県立精神保健福祉センターで地域精神保健に25年間携わっておりました。業界と言われる県内の施設や市町村での相談や研修、また県内の大学で兼任講師を務めております。

T13 大学におけるカルト対策—法律の視点から—（研修領域D）

講師 滝本 太郎（日本脱カルト協会）

大学には安全配慮義務があります。「ある法律関係に基づいて特別な社会的接触関係に入った当事者間においては、一方が他方にその生命及び健康を危険から保護するよう配慮すべき義務」のことを指します。セクハラ・モラハラ・パワハラの防止が、企業・大学に求められるのと同じように、破壊的カルト団体に学生が取り込まれないようにするのも、大学の安全配慮義務として求められます。

この問題は、宗教団体以外にも自己啓発、劇団、部活などで起こっており、宗教問題そのものではありません。カルト問題の本質は、支配と服従の問題です。人権は個人の尊重のためにあります。宗教団体などの自由は、個人の自由に優先しきません。学生は、当初から十分な情報を得た上で人生を選択する自由があったところ、破壊的カルトではこの自由が侵害され、学業、心身の健康などが侵害され、ついに加害者になってしまいくのです。

影響力や集団内の心理といった心理学分野の方々が、予防策の普及、親御さんの相談、そして本人対応につき、もっともっと関与していって下さい、お願いします。

講師紹介
滝本 太郎（たきもと たろう）
1957年生、弁護士。坂本事件をきっかけにオウム対応、脱会カウンセリング・空中浮揚写真などし、サリン攻撃を受けたが生き残る。脱会者の集まり「カナリヤの会」、日本脱カルト協会理事。著書に「宗教トラブル110番」「異議あり！奇跡の詩人－ドーマン法、FCの真実」など。
T14 談話室・居場所による学生支援（研修領域D）

講師 安住 仲子（神戸女学院大学）

居場所支援は今では大学になくてはならないものになりました。しかし学生相談室による居場所支援は、どんなニーズがあるのか、誰を対象にするのか、何を目的にするのか、どんな場所にしたいのかのコンセプトが明確でないと、思うような運営はなかなかできません。ただ空間があって、椅子やソファがあるだけでは、こちらが来てほしいような学生の居場所にはならないのです。居場所運営にかかわる人的・経済的・空間的資源をどう作るかも重要ですが、それをどのように運営したいのかをまずイメージしていただくことが大事だと思います。裏を返すとコンセプトがしっかりしてさえいれば、どんな小さな空間であってもちゃんと機能するというの、談話室運営のおもしろさといえるでしょう。談話室運営がうまくいかない、あるいはこれから談話室を作ろうと思うのだけれど何から手をつけたらいいのかわからない、そういう事例を募集いたします。

講師紹介

安住 仲子（あずみ のぶこ）
神戸女学院大学カウンセリングルーム専任カウンセラー。学生相談を始めて30年。学生相談室が開設した1986年から談話室がありましたが、その後地震で全壊し、学内移転を繰り返して2006年によく今の形に落ち着きました。今はその中で試行錯誤しながらいろいろなプログラムを行っています。